

みんなで取り組む 地域の魅力づくり

～福島町の文化資源の伝承と発掘、発信～



千代の山と千代の富士という2人の横綱を輩出したまちとして知られる福島町。世界でも最長級の海底トンネル「青函トンネル」建設では、北海道側の基地として、半世紀にわたった大工事を支えてきたまちでもあります。

北海道唯一の城下町である松前町、縄文遺跡や五稜郭などの名所が多い函館市など、道南のほかのまちと肩を並べて、町内には歴史的な文化資源が残っています。

地域にある文化資源を守るとともに、新たな魅力を発掘し、情報発信しながら、まちを元気にしようと、官民がそれぞれの立場で取り組んでいます。福島町に引き継がれる代表的な文化資源と、それを発信する活動を紹介します。

松前神楽を伝承する「神楽の町」

「横綱の里」と呼ばれる福島町ですが、「神楽の町」としても知られています。2018年に国の重要無形民俗文化財に指定された「松前神楽」は、福島町で引き継がれてきた大切な文化資源の一つです。

江戸時代、松前神楽は松前藩が城中で行う行事として、道南地域の神職によって厳しい決まりごとの中で伝えられてきました。19世紀のはじめに松前神楽という名が確認されていますが、城内神楽や鯉御神楽、秋味神楽などとも呼ばれて、明治以降になってから広く松前神楽という名が定着しました。

舞楽と湯立^{*1}という2つの形式があり、合わせて33の演目があります。道内では、福島のほかには松前、函館、小樽の4つの地域に保存会があり、各地の神社例大祭などで披露されています。

福島町の松前神楽は、まちの総鎮守として400年以上もこの地域を見守ってきた福島大神宮で神職を務める常磐井家が受け継いできました。

1950年に文化財保護法が制定され、福島町では1952年に松前神楽を町の無形文化財として指定しました。また、1958年には福島大神宮の15代目である常磐井武季宮司^{たけすえ}を含む12名^{*2}が演技保持者として北海道無形文化財に指定されました。

15代の武季宮司は、松前神楽の名手として活躍した人で、当時の舞いは、函館に住むアマチュアカメラマンによって短編映画「神楽の町」として映像に残さ

※1 湯立
釜で湯を沸かして、その湯を用いて行う神事のこと。

※2 12名
常磐井武季氏を含めた福島町の4名のほか、松前町、小樽市からもそれぞれ4名が指定された。

れています。また、武季宮司は常磐井家に伝わる松前神楽の歴史や舞い方、作法などを『正統松前神楽』という一冊の資料にまとめました。

その後、16代目の武宮宮司、17代目の武典宮司に受け継がれ、現在に至っています。

松前神楽の舞い手や奏者は神職が務めるのが基本的な考えですが、福島町では武宮宮司時代に、演者や奏者を町民らに広げていきました。4つの保存会では、踊り方や演奏などにそれぞれ違いがあります。福島町の松前神楽を伝承していくために、後継者確保が大きな課題になっていたのです。そこで、関心のある町民にすそ野を広げ、舞いや演奏を指導し、今もその人たちが福島町の松前神楽を支えています。

また、福島町では演目が終わるごとに「ようそろ～」と声をかけます。これは、かつて松前藩主が演奏と演技が一つになった素晴らしい神楽を演じた時に「よくて候」「よくできて候」といってほめたことが始まりといわれています。ほかの地域でこの慣習はみられなくなりましたが、福島町では今も引き継がれています。

「父に指導を受けた人たちと一緒に、福島風の松前神楽を今も映像資料や祖父が残した『正統松前神楽』

を参考に練習しています。ずっと見守ってきてくれた福島町民の皆さんが『やっぱり福島の神楽が一番』という声が励みです。ただ、中にいると地元にあるものの価値や魅力に気付かなくなってしまうこともあります。町外の人たちをはじめ、たくさんの人たちが神楽に触れる機会を作っていくことの大切さを感じています」と武典宮司は言います。

地元の歴史を学び、発掘する「福島町史研究会」

1997年、福島町では歴史に親しむ町民らが集まって「福島町史研究会」が発足しました。

1993～97年にかけて『福島町史』が刊行されていますが、その編集長を務めたのが永田富智氏です。永田氏は『松前町史』編集長や『新北海道史』編集員のほか、地元にある大千軒岳の周辺で106人の隠れキリシタンが殉職した「えぞキリシタン」研究でも知られた郷土史研究家です。

『福島町史』編集に当たって永田氏は、町民向けの歴史講座を開催し、後継者を育成しようと歴史に関心のある町民を町史の執筆に巻き込んでいきました。その中で歴史に親しむ町民の機運が高まり、福島町史研究会（以下、研究会）発足につながりました。永田氏は研究会の顧問を務め、定期的に講座を開催し、地名の由来や町の成り立ちなど、地元ならではの歴史物語を会員に伝えていきました。現地に出向く歴史探訪の機会も設け、町内の歴史的な文化資源の認識や理解が広がっていきました。

永田氏との出会いが大きな転機になって、現在まで福島町の歴史発掘に尽力しているのが、研究会会長で、建設業を営む中塚徹朗氏です。「永田先生に出会うまで、日本史にあまり興味はありませんでしたが、ローカルな歴史を永田先生と一緒に歩いて、足もとにたくさん歴史資源があることに気が付きました」と言い



松前神楽の「注連祓舞」を演じる福島大神宮17代目の常磐井武典宮司（写真提供：森征人氏）

ます。

研究会の活動では、測量家の伊能忠敬による北海道測量の最初の地が福島町吉岡であることを発見。この発見からは、測量をする独特の姿をした伊能の銅像が建立された「伊能忠敬北海道測量開始記念公園」が整備されるなど、新しい名所が誕生しています。

地域の新しいコンテンツを生み出す

研究会の活動は、現在まで続いている「殿様街道探訪ウォーク」開催のきっかけにもなりました。

江戸時代、松前から函館に至る約98kmは、当時の幹線道路でした。このうち福島町から知内町に至る古道は、「殿様街道」と呼ばれるようになっていきます。

地元では多くの殿様が通った道があると言い伝えられていましたが、平成時代に札幌から福島町に移住した山道に詳しい人がその古道を探し出したのです。これが研究会メンバーに伝わり、歴史あるその道を歩いてみようという企画が持ち上がりました。

当初は研究会メンバーとその仲間を対象にしていたが、徐々に町民にも参加者を広げ、現在は実行委員会が主催する形で春と秋に開催されています。

殿様街道探訪ウォークでは参加者に楽しんでもらうと、^{みの}蓑をまとってサムライのかつらをかぶった中塚



「殿様街道探訪ウォーク」で参加者に解説をする中塚会長

会長が名所でガイド役を務めています。箱館戦争で砲台が運ばれた「砲台跡」や川わたりの難所で知られた「四十八瀬」など、そこでの史実やエピソードが解説されます。古道を歩いた後は、町内千軒地域で収穫された「千軒そば」がふるまわれ、松前神楽も披露されるなど、福島町の食と文化を味わえると評判のイベントです。

殿様街道探訪ウォークは2002年に始まりましたが、ちょうどこのころ千軒地域では、そばを生産する「千軒そば生産会」やそば打ち愛好会「千軒そばの会」が、まちおこしに一役買いたいと活動していました。

その過程では、千軒そばと地域の文化を融合させ、そば畑の中で豊作を祈って松前神楽を奏上する「千軒そばの花観賞会」も開催されるようになりました。

殿様街道探訪ウォークとともに、地域の文化資源を活かした新しいコンテンツが生まれたといえます。



白いそばの花の中で松前神楽の「八乙女舞」などが披露される「千軒そばの花観賞会」(写真提供:森征人氏)

「そのまちに歴史好きの人がいるかどうかで、地域の豊かさは違ってくるように思います」と中塚会長は言います。

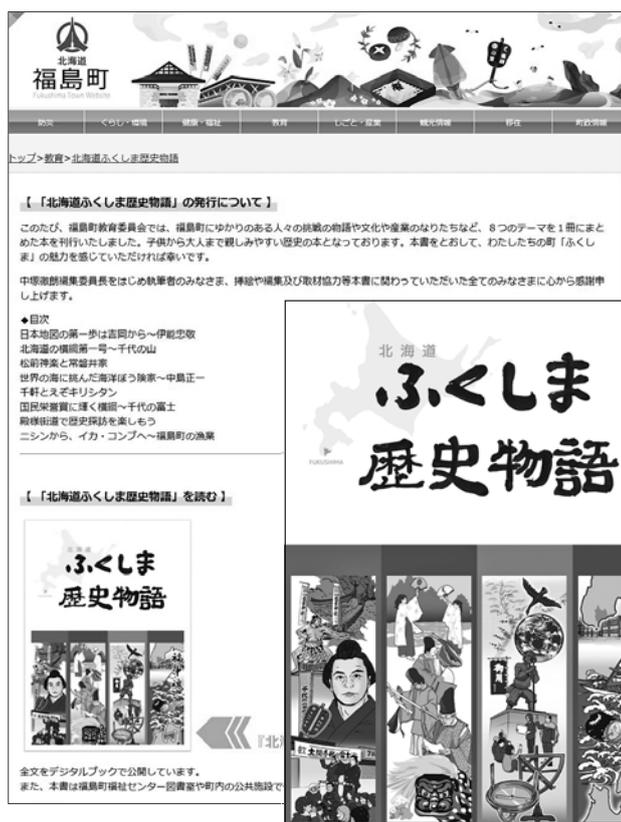
近年、殿様街道探訪ウォークや千軒そばの花観賞会にはバスツアーを企画してやってくる団体も現れるようになり、福島町のおなじみのイベントに成長しています。また、(公社)日本山岳会が創立120周年記念事業として実施している全国山岳古道調査の対象に、道内で増毛山道とともに殿様街道が選ばれるなど、研

研究会の活動をきっかけにいろいろな分野での広がりが出てきています。

『北海道ふくしま歴史物語』の発刊

2021年4月、福島町教育委員会は伊能忠敬や松前神楽、殿様街道など、地域にゆかりのある人物や歴史エピソードをまとめた『北海道ふくしま歴史物語』を刊行しました。町内の小学3年生以上の児童や生徒、町内全世帯にも配布され、学校では地元の歴史を学ぶ副読本として、家庭では地域の歴史資源を改めて知るツールとして活用されています。

この歴史図書の発案者は、鳴海清春町長です。



『北海道ふくしま歴史物語』
福島町のホームページからも閲覧できる

「福井県に行った方からのお土産でいただいた歴史漫画『白山平泉寺物語』^{※3}との出会いがきっかけです。歴史好きなので、一気に読み終えて、このようなものを福島町でできないかとずっと温めていました。

当時はまだ町職員でしたが、町長に就任して教育委員会に思いを伝えていました。町外や道外で活躍する福島町出身者の皆さんからたくさんの寄付をいただき、ふるさと応援基金を設立しましたが、その活用策としても打ってつけだということになり、実現できました」と言います。

編集委員長は研究会の中塚会長が務め、常磐井武典宮司、鈴木志穂学芸員らが8つのテーマを分担して執筆。たくさん子どもたちに読んでもらいたいと、わかりやすさを重視して編集が進められました。

わかりやすい表現と相まって、物語の中に登場する人や場所など、身近な話題ばかりなので、町民からは好評のようです。

「町内には、私たち先祖の生きざまの足跡が残っています。それを町民が大切にすることは、まちの誇りにもつながっていく。代々子どもたちに伝えていくことで脈々と続いていくものになります。子どもたちには、まちの文化や歴史を担っていくのは自分たちだということにも気が付いてほしい」と、鳴海町長は子どもたちへ託す



「民間の皆さんがまちの資源を一生懸命に磨いてくれて光を放ち始めた」と話す鳴海町長

※3 『白山平泉寺物語』

福井県勝山市にある平泉寺の歴史を描いた漫画。福井県平泉寺町まちづくり推進協議会発行。



『北海道ふくしま歴史物語』を使って行われた福島小学校での総合学習の様子

思いを語ります。

松前神楽や殿様街道など、民主体の活動を尊重しながら、次世代につなげていくための情報発信を官が支援する。福島町では、そんなスタイルが定着し、地域の文化資源の伝承と発掘、そして活用がなされてきているのです。

手づくりで、みんなで守り伝える努力

福島町には郷土資料館や博物館は建設されていませんが、官民が連携して運営している「チロップ館」※4があります。



教育委員会と町民が連携して運営されているチロップ館



2008年に廃校になった町立白符小学校の校舎を有効活用してもらおうと教育委員会が呼びかけたところ、生涯学習サークル「チロップの会」会長の熊谷正春氏が無償で借り受けてくれることになり、趣味で集めていた骨とう品やレコードなどを展示するようになりました。2017年に熊谷氏が展示していたものは町に一括寄付され、2018年に教育委員会とチロップの会が共同で社会教育施設「チロップ館」をリニューアルオープンさせました。

チロップ館には、館崎遺跡※5から出土した縄文土器のほか、昔の漁具、昭和時代の骨とう品や看板、玩具など、さまざまなものが展示されています。圧巻は、毎年2月下旬から5月中旬ころまで、期間限定で開催される「ひな・武者人形まつり」。町内をはじめ道内外から寄贈されたひな人形や武者人形が1,300体以上保管されており、ひな祭りと子どもの日に合わせて80組ほどを体育館に飾っています。

リニューアルオープンに当たって展示構成を担当した鈴木学芸員は、「熊谷さんがいることで普通の郷土館や博物館とはひと味違った展示になっています。面白味のある構成になっていると思います」と話します。

青函トンネル工事で栄えた昭和50年代に1万人を超えていた福島町の人口は、現在4千人を切っています。人口減少が進む中、地域の文化資源を伝承していくためには、官民の連携が欠かせません。

「研究会の課題は会員数の減少です。30人ほどいた会員も今は10人ほどになり、一人の負担が増えています。研究テーマを共有して、互いのメリットになるような体制づくりをしています」と中塚会長

※4 チロップ館

チロップとはアイヌ語で「鳥（鷹）の多いところ」を意味する。

※5 館崎遺跡

吉岡地区館崎で、1967年に実施された町内の遺跡分布調査で見つかった地下遺構。縄文前期後半から後期初頭にかけての集落跡で、盛土遺構や竪穴住居跡、墓などが複雑に重なり合っていた。国内最大級の岩偶や長野県産の黒曜石を使用した矢じりなどが出土している。

は言います。研究会の事務局長は福島大神宮の武典宮司が担っていますが、会員には小野寺則之教育長や鈴木学芸員が名を連ねて、教育委員会と連携しやすい体制につながっています。『北海道ふくしま歴史物語』の編集作業でも、この連携力が有効に作用しました。

一方で、地域にある歴史的な文化資源が撤去されてしまうという出来事も起きています。『北海道ふくしま歴史物語』にも掲載された月崎神社の鳥居が、町道移設のための工事対象エリアとなってしまう、神社の役員会が撤去を了承したのです。この鳥居は、福島町から小平町鬼鹿に移住し、大漁業家となった花田伝七氏がニシン漁で築き上げた資金をふるさとに還元しようと1855年に奉納したものです。

鳥居は今年7月2日に撤去解体され、福島大神宮に保管されました。撤去作業に先立って、教育委員会では中塚会長が社長を務める建設会社の協力で3Dスキャンによるデータを取得。柱に刻まれた文字や模様

などを記録して、今後の研究や再建に活用できる情報を残しました。

「地域にある歴史的な文化資源に対する思い入れは、人それぞれです。歴史の中で、神社への信仰や古い歴史を伝える町の景観が失われていくことも受け止めなければなりません。そこで、私たちが後世に残していくための調査や情報を集めておくことが重要になってきます」と鈴木学芸員は言います。そこではICT技術を積極的に採用していくことが、1つの糸口になるといえるでしょう。

町内には円空作観世音菩薩像などの町指定文化財がありますが、指定されていない歴史資産や文化資源を改めて見直し、状況に応じて保護策を講じることができるよう、町指定文化財の再構築の取り組みも期待されます。

行政、住民、民の団体や企業など、さまざまな立場の人たちが連携して、まちの文化資源を手づくりで守り伝え、新たな資源を発掘することを実践してきた福島町。足もとの文化資源を活かしながら、手づくりでまちの誇りを次世代に伝えていく真剣な活動が、まちの魅力につながっているようです。人口減少時代に小さなまちが生き抜いていくためには、みんなで次世代につながる夢と可能性を伝承していくことが大切です。福島町の挑戦は、その先駆的な取り組みの一つといえるでしょう。



伊能忠敬北海道測量開始記念公園などを訪れた松前町の中学生に解説する中塚会長と鈴木学芸員。町外からも授業の一環で講師派遣依頼があれば対応している